

最近、有名な映画を時代が変わったので作り直す、ということがしばしば起こっています。6年前でしたが、電気屋さんで「ベンハー」という新しい映画を手に入れて、宮崎や延岡の人々にも見ていただきました。数年前には「エクソダス 神と王」という映画もありました。

エクソダスの話をしたいと思います。エクソダスとは、「道を出てゆく」というのが本来の意味ですが、これが聖書の2番目の書物「出エジプト記」の英語のタイトルにも使われています。つまり、「出エジプト記」という映画で、副題は、本当は複数になっていて「神々と王たち」という名前が付いています。

これは、今から68年前に作られた「十戒」の映画を作り直したものでした。私はこれまでに、この十戒をテーマにした映画を3つほど見たことがあります。一番の関心は、海が分かれて、人々がそこを渡る場面の描き方です。どれも神様からの命令でモーセが杖を挙げたりして、何かの行動をとると、不思議な魔法のように、海が分かれました。

有名な十戒の映画では、分かれた水が混じり合う場面を撮影し、逆回しにしたようで、今から見るとちょっと「子どもだまし」のようでした。その後で作られた映画では、やはり何らかの形で神様が介入しているようにして、海が分かれます。水が退いた海底が、岩だらけで人々は昇り降りをくりかえし苦労しながら歩いているものや、水が引いて、平らな砂浜が広がるものなどがありました。

最近の「エクソダス」で驚いたのは、海を渡るより前、エジプトを脱出する時に、モーセが脱出ルートの説明をして、引き潮の時、この部分は水深が浅くなるので、ここなら紅海を渡れる、と最初から自分の経験で道を決めているんです。出エジプトの最大の奇跡と思われる出来事を、このように説明し、実際、その場にモーセたちが行くと、海の水が左から右に強い流れとなって動いているんですね。

私は中学生の時、従兄の車に乗せてもらって、鳴門海峡に行ったことがあります。鳴門の渦は見えませんが、瀬戸内海の海面の方が太平洋より高いために、映画と同じように左から右に、川の流れのように、海の水が流れていたのを思い出しました。

有名な「十戒」と今回の「エクソダス」の間には、60年近い時間の隔りがありますが、それは私たちが聖書の出来事を、ただやみくもに「奇跡」と呼ぶのではなく、21世紀の私たちの頭で理解できる形で受け取ろうとした、現代の聖書の読み方が影響しているように思えました。

私たちは、ただ「これは私たちには理解できない、神様の力によるものだ。」と簡単に結論を出してはいけない、と言っているような気がするのです。神様が造られた自然を観察し、人間の経験による知恵で道が開くこと。特に今回の映画では人間の努力という面を強調しているように思えました。

このような映画の話を最初にしたのは、今日の福音書で、イエス様が船に乗っている時、風を叱りつけて、突風を静められたという、奇跡物語とも関係があるかもしれません。しかし、どちらかと言うと、旧約聖書のヨブ記との関連で話がしたかったのです。

ヨブのことは、皆さんよく御存じとは思いますが、簡単に説明します。昔、ヨブという品行方正な正しい人がいました。神様は彼を祝福し、大勢の家族や財産を与えてくださいました。ところが、急に不幸が襲います。先ず、彼の子どもたちが死にます。そして財産も奪われてしまうのです。しかし、その時は、ヨブはそれを受け入れようとします。すると次に彼の体もひどい皮膚病におかされました。その時も彼はそれを受け入れようとしますが、悲しみと苦しみの中がありました。

大変な悲しみと苦しみの中にあるヨブを慰めようと、三人の友人が訪ねてきます。しかしあまりの悲惨さに、友人たちも七日七晩、ヨブと一緒に座っているしかありませんでした。

しかしやがて、ヨブが口を開いて話し始めると、どうしてこんな不幸がヨブの身に起こったのか、友人たちとヨブとの間に、議論が始まるのです。そんな議論が尽き果てた時に、神様がヨブに語りかけたところが、今日の旧約聖書です。

今日のヨブ記の箇所を読むと、最初から神様はヨブに叱りつけるような言い方をされます。

『38:1 主は嵐の中からヨブに答えて仰せになった。

38:2 これは何者か。知識もないのに、言葉を重ねて／神の経綸を暗くするとは。

38:3 男らしく、腰に帯をせよ。わたしはお前に尋ねる、わたしに答えてみよ。

38:4 わたしが大地を据えたとき／お前はどこにいたのか。知っていたというなら／理解していることを言ってみよ。

38:5 誰がその広がりを選んだかを知っているのか。誰がその上に測り縄を張ったのか。

38:6 基の柱はどこに沈められたのか。誰が隅の親石を置いたのか。』(ヨブ記 38 : 1～6)

「お前のようなちっぽけな人間が、神である私のやることなど理解できないだろう！」と言っているようなものです。

そしてこの神様の言葉を聞いて、ヨブは40章4節で答えます。

『わたしは軽々しくものを申しました。どうしてあなたに反論などできましょう。私はこの口に手を置きます。』と降参しています。

しかし、このヨブの悩み、苦悩は、この言葉で本当に解決したのでしょうか？

私は今日、このヨブ記のことをもう一度考えたい。伝統的ではない、現代の解釈を紹介したいのです。もっとも、この新しい解釈は現代ではとても有名になって、私も説教とは別の機会に話したことがあると思います。

しかし、日曜日の礼拝で、ヨブ記が読まれることは、3年サイクルの中で、今年B年の特定7の今日と、C年の復活節第2主日です。もっとも、C年の方は、第一朗読に使徒言行録を使えば、旧約は読まないわけです。他に毎年聖土曜日の旧約にはヨブ記が選ばれていますが、普段私たちが日曜日にヨブ記が読まれるのは、3年間で今日だけです。それで、神様のなさること、御心は私たち人間にはわからない、という伝統的な解釈になる箇所を読むだけで、ヨブ記を終えるのは問題があると思ったのです。

もう20年以上前のことですが、『なぜ私だけが苦しむのか』という本を紹介されて、感動して読んだことがあります。副題には「現代のヨブ記」という名称がついています。元々の英語のタイトルは、「When bad things happen to good people」（良い人に悪いことが起こる時）という書名です。著者は、ユダヤ教のラビ、ハロルド・サムエル・クシュナーという人です。

この本の中でクシュナー先生は、ヨブに突然襲った不幸をどのように理解するか、面白い解説をしています。引用します。

『この書物を理解し、それが示している答えを知るために、ヨブ記のすべての登場人物と読者のほとんどが信じたいと思っている、三つの命題を書き出してみましょう。

(A) 神は全能であり、世界で生じるすべての出来事は神の意志による。神の意志に反しては、なにごともし起こりえない。

(B) 神は正義であり公平であって、人間それぞれにふさわしいものを与える。したがって善き人は栄え、悪しき者は処罰される。

(C) ヨブは正しい人である。

ヨブが健康で経済的にも豊かであるかぎり、これら三つの命題は同時に無理なく信じることができます。しかし、ヨブに不幸がおとずれ、財産や家族を失い、健康まで害してしまうとなると、ことはやっかいになります。この三つを、同時に正しいと考えるわけにはいなくなるのです。どれか一つを否定して、はじめて、残り二つを正しいと主張できるという状態になるのです。』

ヨブの友人たちは、(C) を否定します。ヨブが何か悪いことをしたので、神様は正しい方だから、ヨブの罪に対して罰を与えたのだ、という考えです。これに似た説明を私たちもしやすいのではないのでしょうか。あなたが今苦しんでいるのは、神様に深いお考えがあって、あなたに新しいことを学ばせようとしているんだ、という説明です。伝統的な解釈で、神様がヨブに語りかけるのを受けてヨブが引き下がるというのも、これに含まれるでしょう。でもこんなことでは、何の慰めにもなりません。

一方、ヨブの方は(B) を否定します。私は正しく生きているのに、神様は公平ではなく、意地悪だからその全能の力で私をいじめているのだ、というわけです。私は特に悪いことをしていないのにこんなひどい目に逢されるのは、神様が悪いのだ、という考えですね。しかしこれでは信仰を失います。

しかし、ここでクシュナー先生は、(A) を否定することを勧めます。「神様は全能である」という、わたしたち聖書を信じる者たちが、自明の理としていたことに疑問を投げかけ、「神様は人間が幸福になることを願っておられるが、神様にだってできないことがある。」という理解によって、どれだけ多くの人が苦しみから解放されるか、とクシュナー先生は言います。

クシュナー先生の息子アロンは、「早老症（プロゲリア）」という、不治の病にかかって、若いのに老人のような風貌になり、わずか14歳と二日で闘病の末、亡くなりました。先生は、自分の息子の死から、このような理解をしました。神様は、決して全能の力を使って、自分の息子を不治の病にかからせたわけではない。人間の幸福を望んでいるけど、神様にもできないことがある、という考えです。

そして、この解釈が、多くの難病や、不慮の事故などで不幸に落ち込んでいる人々の慰めになったように思えるのです。

それで、改めて考えたいのですが、私たちの現在の状況を、わたしたちは仕方ないこと、として諦めたり、あとは神様に頼るしかない、みたいな傾向があるのではないかと、思います。もし、私たちに悪い状況があれば、それは私が悪かったからだ、と諦めたり、神様は間違っている、と神様の責任にして自分の努力の方をやめたりするのはなく、状況から抜け出すために神様が私たちに与えた経験を活かす道を求めておられるのではないのでしょうか。

神様の全能ということについて、少しだけ話します。

神様は私たちがどんな状況にいても、その力を使って奇跡のような形で救ってくださるわけではありません。もし、それができるなら、もう、今年の1月1日に起こった能登半島地震で、だれも死ぬことはなかったでしょう。しかし、そうはいきませんでした。その後の復興が遅れているのには、人間の責任がありますが、自然災害を避けることは難しいのです。

神様が世界を造られて、その時の法則に従って、世界は動いています。これは神様の全能の力によっている、と言えるでしょう。従って、神様の造られた世界の秩序によって、月が地球の周りを回り、海の水は満潮になったり、干潮になったりします。

モーセはそれを知っていて、引き潮の時、それを利用して、経験をもとにして紅海を渡ったということです。

神様は全能の力を発揮して世界を造られ、人間には自由意志を与えて、人間が自分で選び、決断することができるようにされました。その結果、神様が最初に考えられた可能性のなかで、世界は神様の予想とは違う方向に発展しているのかもしれませんが。そして、神様も、人間も考えていなかったような、別の力も働いて、いろんな出来事が起きるようになったのです。

それらをすべて、神様のせいにはできません。また、人間にその責任を負わせることもできないかもしれません。しかし、どんな苦しみの中にあっても、そこから立ち直ることができるように、私たちに働きかけ、共に歩んでくださる神様を私たちは信じたいのです。

今日はヨブ記に関連してお話ししました。